

私のおじいちゃん

小牧市立小牧西中学校

私には一緒に住んでいる祖父がいる。そんな祖父はここ数年でできないことが増えた。ついに家の中でも杖をつかないと歩けなくなってしまった。

私は、祖父にすいぶんお世話になった。かわいがってもらった。たくさんの愛をもらつた。幼い頃は、祖父のおんぶでお昼寝をしていた。母が保育園のお迎えに来られないときは、祖父が迎えに来てくれた。いろんなところに連れて行ってもらった。祖父には感謝しかない。だからこそ、私は、祖父に今できることをしていきたいと思っている。

祖父は今、お風呂に入るにも、病院に行くにも、手伝いがないとできなくなってしまった。今は私たち家族が祖父の身の回りのことをしているが、家族がいなかつたら祖父はどうなっていたのだろう。テレビなどでよく見る「孤独死」という言葉が、急に身近に感じられた。

孤独死を防ぐためには、地域との交流が大切だと思う。交流の場を求める、気持ちを外に向けたり人と話したりすることで、少しは孤独が解消されると思う。そんな交流の場を、たくさん作ることができたら良いと思う。しかし、私たち中学生だけの力では難しい。

中学生二年生の冬、授業で「民生委員」について調べる機会があった。民生委員についてよく分からなかったので、調べてみた。すると、民生委員とは、厚生労働大臣から委嘱され、それぞれの地域において、常に住民の立場に立って相談に応じ、必要な援助を行い、社会福祉の増進に努める人と書いてあった。地域にはそういう人たちがいることを初めて知った。

祖父の体が不自由になってしまったのは、昨年末のことだ。年が明けたと思ったら、大きな地震が起きた。大きな天災が起きてしまったら、体が不自由な高齢者はどうなってしまうのだろうか。障がい者の人たちはどうなってしまうのだろうか。体が不自由な高齢者の人たちは、避難場所に行くにも体が不自由で一人では行くことができない。行けたとしても、避難所での生活は体が不自由な高齢者には大変だ。障がい者の人たちの中には、パニックになってしまふと声を出してしまったり、じっとしていられない人もいると聞いたことがある。避難所にいる他の人たちの迷惑になってしまふと遠慮して、避難所に行かない人もいる。そういう人たちはどうなるのだろうか。体が不自由な人たちが入居できる福祉避難所なども、電気や水道が使えなくなったり、施設が倒壊したりと、天災の影響を受けている。だからこそ、施設に任せきりにするのではなく、地域で協力して支えることが大切だと思う。

誰もが安心して暮らせる場所があることはとてもいいことだと思うし、そうであるべきだと思う。このような場所を作るには地域の人たちと日頃から顔を合わせ、挨拶をし、話をし、繋がりをつくることが大切だと思う。民生委員の人たちや施設に任せきりにするのではなく、誰かが困っているときには、手を差し伸べる。そして地域の人たちは繋がっていくと思う。

それぞれの「普通」の形は違うだろうし、私の祖父のように年を取れば「普通」が変わっていくこともある。それでも、人との繋がりが大切であるということは、まぎれもない「普遍」である。今を生きる全ての人が、人と人との繋がりの中で、元気で明るく過ごせる社会になってほしいと思う。私が、祖父を支えていこうとすることは、そんな社会をつくるための小さな一步になると信じている。